

報告

第 50 回日本理学療法学会大会 —理学療法 50 年のあゆみと展望—

医療法人社団祐昇会 瀬谷みなみだい整形外科 山本 一樹

1. はじめに

2015 年 6 月 5 日から 7 日までの 3 日間にわたって東京国際フォーラムにて第 50 回日本理学療法学会大会が開催された。

今回私は 3 日間学会に参加し、様々な事を学ぶことができたのでここに報告する。

2. 第 50 回日本理学療法学会大会について

理学療法士協会が設立された 1966 年に第 1 回理学療法学会大会が開催され、今年で第 50 回を迎える。

記念すべき大会となった今回の日本理学療法学会大会は、「理学療法 50 年のあゆみと展望～新たな可能性への挑戦」をメインテーマとして開催された。

内容は 50 回大会記念オープニングシンポジウム「歩行のメカニズムとその障害」から始まり、内山靖大会長（名古屋大学大学院医学系研究所）による大会長基調講演、これまでわが国の理学療法を作ってきた先人達が 50 年の歴史を振り返り、今後の展望を語ったメインシンポジウム、海外からの研究教育・職能組織のリーダーを招聘した国際講演、教育講演、症例検討やディベートを行う参加型ディスカッション、モーニングセミナー、ヤングインパクトプレゼンテーション（若手理学療法士による活動報告）、学生企画など非常に充実したものとなっていた。

また演題発表は 2,000 題ほど、英語発表は 100 題ほどとなっていた。

第 51 回大会以降は開催形式が変わり、各分野ごとに分かれ分科学会として単独で学会大会を開催する場合や、今まで通り各分野が集まり連合形式で開催する予定となっている。

3. 第 50 回日本理学療法学会大会に参加して

学会大会に参加して先輩方の講演を聞いたことで普段聞くことのできない、今までに日本の理学療法が歩んできた道のりを学ぶことができた。

今後は私を含め経験の浅い理学療法士が、先輩方が研究し積み上げてきたものを学び、臨床に活かし、さらに研究していき、科学的な根拠に基づき誰でも一定の結果を出せるようにならないといけないと言われている。しかし私は研究が進んで科学的な証明がされても一定の結果を出すことは難しいと考える。

なぜなら、研究され効果があるとされていることをそのまま患者さんに当てはめようとしても、上手くいかないことが少なくないからだ。私は整形外科で治療を行っているが、教科書や文献にある運動療法を同じように患者さんが行うには難しい場面によく遭遇する。そういう時に一番必要なのは、科学的な根拠ではなく、個人の経験や知識、応用力（考える力）であると思う。

例えば痛みなどでセラピストが治療の際に行おうとした事が行えない時に、セラピスト自身がそれをやめてしまう場面をよく目にするが、その時にセラピストが「痛そうだからやめよう」ではなく「なぜ痛いのか」「こういう風にしたら大丈夫なのではないか」とその現象に対して深く考えられるかどうか結果に繋がっていくと考える。

整形外科の分野では患者さん一人一人の生活背景を知り、なぜそこが悪くなったのかをセラピストが考えていかなければならないと感じる。膝や腰などの痛みを取ることは理学療法士でなくてもできる。しかし患者さんの生活背景を考えて治療を行うことや、楽に動作が行える方法を患者さんと一緒に考えることは理学療法士にしかできないと思う。

さらに 50 年経った時に理学療法士が医療や介護の分野等で活躍するためには各分野で経験を積み、より専門性を高めていき、他の職種との差別化を明確にしていく必要があると私は考える。

医療法人社団祐昇会 瀬谷みなみだい整形外科
〒246-0031 神奈川県横浜市瀬谷区瀬谷 1-23-4